
こんな危険な勇者いていいの？

新庄アル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな危険な勇者いていいの？

【Nコード】

N6214P

【作者名】

新庄アル

【あらすじ】

とある伝説の勇者^{ヒロ}が魔王を倒すため女だらけのパーティーを組むたびにでる。

ほのぼのR15？恋愛ファンタジーが今始まる！！

勇者はエロかった

とある地方のとある村に一人の勇者がいたそうなの

その勇者はある伝説があつたそうなの

その伝説とはずばり

伝説の勇者とはエロかった！！

という伝説があつたそうなの

その勇者は今魔王を倒すたびに出かけてるそうなの

とある村「巣家邊村」

勇者「さーてと、魔王倒すために仲間（女）あつめますか」

この勇者の名前？そんなのありません皆さんで決めちゃってください。

女「ここに伝説の勇者がいるのね」

勇者「っは！一人の女が村にはいった！」

なぜ勇者は人がはいったかわかるといふと勇者の鼻はものすごくよく（女だけに）において半径500mの人（女）がわかるという！

ゆえに勇者はこれを女センサーという。

まあこれはある意味伝説の勇者ですな。

勇者「だんだん近づいてくるぞ」

女「この店に勇者がいるのね！ん？あの格好は伝説（最強）の勇者
！？」

どうやら女は勘違いしたようだ。女がさがしてる勇者は隣の店にいる。

女「もしかしてあなた伝説（最強）の勇者？」

勇者「いかにも俺は伝説^{ヒロ}の勇者だが？」

女「あなたを探してたの、一緒に魔王を倒してくれる？」

勇者「奇遇だね。俺も魔王を倒したかったんだよ」

女「じゃあいきましょう！」

勇者「まちな！ただとはいわせねえぜ」

女「やっぱただじゃだめか」

勇者「表へいこう」

ひとけの無いところ

女「でいくら払えばいいの」

勇者「金はいらねえよ」

女「え？」

勇者「体ではらってもらえばな」

勇者は女の胸をもみはじめたそうなの

勇者「なかなか多きい胸だ。そして弾力がありやわらかい。バストは88といったところか」

勇者の手は触ったもの（女の胸やおしり）の大きさを一瞬にしてわかるという

女「きゃあ！ちよつと」

勇者「どうしたんだい？へつぶ！」

当然なぐられたそうなの

女「何すんのよエッチー！」

勇者「いいじゃんかあへるもんじゃないし」

女「あんたほんとに伝説（最強）の勇者？」

勇者「あたりまえじゃないか俺は伝説の勇者だ。だから君は俺のところにきたんだろ」

女「そうだけど・・・じゃあ私と戦ってもらおうわ」

勇者「何！？」

女「それでああなたが勝ったらあなたについていくわ」

勇者「俺が負けたらほかをあたるのか」

女「そゆこと」

勇者「いいぜ！うけてたつ！」

勇者VS女の戦いが始まる

勇者はエロかった（後書き）

勇者の名前マジで考えていいですよ。

あと女の名前もどうぞ

感想にてお願いします。

伝説の始まり

前回までのあらすじ

伝説の勇者はエロくて女がさがしてる伝説の勇者は最強の勇者のほうだった。

そして今その疑問を晴らすために二人は戦うことに

女「いくわよ！」

勇者「いきなり剣かよ！」

勇者は紙一重でかわしたそうなの

女「なかなかやるわね！さすが伝説の勇者！」

勇者「見切った！！！」

一瞬だった。勇者は女の背後に立っていた！

女「なにがおきたの？」（私は傷ひとつついてないのに・・・！！）

女「まさか！」

勇者「そう、そのまさかさ」

女「私のブラジャー返せー！！どうやってとったのよ！？」

勇者「伝説の勇者に・・・不可能はない！！！！！」

勇者はブラジャーFカップをてにいった

勇者「これで俺が伝説の勇者だとわかったかな？」

女orz（たしかにあのスピードは反応できなかったし認めざるを得ないわ。認めたくないけど）

女「私の負けだわ。あなたについてゆくよ」

勇者「ああ、ではさっそく」

勇者は再び女の胸をもみはじめたそうなり

女（がまんよ、伝説の勇者なんだから）

勇者「なんてでかい胸だ。服を脱がしてあげたい・・・ぶっはー」

女「調子にのるな！！」

またなぐられたそうなり

そしてここに新たなコンビが生まれたそうなり

????「くっくくく、あいつが伝説の勇者か」

はたしてこの男の正体とは！？

伝説の始まり（後書き）

これからもいろんな登場人物だすので名前を決めたい方はどうぞ。
ただしあまりにもひどい名前は使えません。普通の名前でお願いします。

性別

名前

みたいな感じで感想のところに書いてください。

女3人男2人ぐらい決めたらお願いします。

巨乳ツンデレドジッコ!?

勇者と一緒に旅することになった女は勇者とともに「辺鯛」村に向かっている最中だったそうなの

女「あともうちょっとで村につくわ。それとさっきから私のおしりちまちま触ってんじゃないわよ!」

勇者「ぶはー」

辺鯛村

???「辺鯛村へようこそでゲス」

勇者「何だこのゲス?」

???「ゲスはゲスではないでゲス」

女「じゃああんたの名前はなんなの?」

???「えゝとなんだったっけでゲス?」

勇者「じゃあゲスで決定ね!」

ゲス「それでゲスね」

女「適当ね・・・」

勇者「で、お前は何のようだ？」

ゲス「そうだったでゲス。あなたたちでこの村はなんと1000人目の来客になりましたでゲス」

女「100って・・・びみょー」

ゲス「ですのでこの村一番のホテルの無料宿泊券をプレゼントするでゲス」

勇者「本当か！？いいやつだなおまえ」

ゲス「それほどでもあるでゲス」

女「でそのホテルはどこなの？」

ゲス「案内するでゲス」

勇者「ここが一番のホテル？」

女「普通・・・というかちよつとぼろい」

ゲス「失礼でゲス！ちよつと和風っぽくしてるだけでゲス」

勇者「まあいいや。お邪魔しまーす」

ゲス「ごゆっくりどうぞでゲス」

勇者「ここが部屋かぁ」

女「ちょっとこれどういうことよ!？」

勇者「どうした!？」

女「布団がつかなくて離せないのよ」

勇者「まあいいじゃないか」

女「鼻血出しながら何いつてんのよ!？」

勇者「さて風呂入ってこよう」

女「どうしよう、なんとか引き離す方法は・・・ブツブツ」

勇者「まったくあの女は、すぐに暴力振るって来るからなぁ。マジこええよ」

女「もう!お風呂はいる!」

女「女風呂どこだろ?」

女「どうかしてあいつにほかのところで寝てもらおう」

ガラガラッと女が入った瞬間勇者は風呂桶スマッシュをくらったそうな

女「なんであんたがここにいのよ!？」

勇者「それはこっちの台詞だ!」

女「あれ？」

勇者「どうした? なにかあったのか」

女「近づいてこないで!」

女「ドアが開かない」

勇者「風呂に閉じ込められたってことか!？」（これはチャンス）

女「こんなやつと一緒にしかも裸で閉じ込められるなんて」

勇者「おちつけ、出口は必ずどこにあるはずだ」

勇者「大丈夫だ! 何があってもお前は俺がまもる!」

女「!」

女「うん、ちゃんと守ってよ。きゃあ!」

勇者「どうした?...!？」

女がすべって勇者に飛び込んでしまったそうなの

勇者「いたた。ん？このやわらかいのは？」

女「きゃあ！どこ触ってんのよ！」

勇者「すいませんでした！！」

勇者（・・・あれ？パンチがとんでこない）

女「別に触るなどはいってないんだからね」

勇者「じゃあ触っても？」

女「べつにいいわよ」

勇者「いや、だめだここを出てからにしよう」

女「そうね」

脱出！勇者の本気！？

勇者「どこかに出口は必ずあるはずだ」

女「ええ、そうね」

勇者「とりあえず手分けして風呂を隅々まで探そう」

女「わかったわ」

女「これは！？爆弾！？」

勇者「何！？でかしたそれで脱出できるぞ！」

女「ほんとう！？」

勇者「これをドアのところに置いて・・・よし風呂に飛び込め！！」

女「う、うん」

ドカーン！！と爆発してドアごと吹き飛ばしたそうなの

勇者「やっと出られるぜ」

女「でもいったい誰の仕業だったんだろ？」

勇者「俺に心あたりがある」

ゲス「ゲスゲスゲス。あいつらきつと今頃爆発で吹っ飛んだでゲス」

勇者「誰が吹っ飛んだって？」

ゲス「な、なんでお前らが!？」

勇者「なんのために俺たちを狙ったかしらねえが、くたばってもら
うぜ!」

ゲス「しょうがないゲスの本気見せてやるでゲス!!」

勇者「な、なんだこの力は!？」

ゲス「どうでゲスこれでも立ち向かうでゲスか？」

勇者「力を貸してくれ」

勇者は女のスカートをめくったそうなの

女「きゃあ!」

勇者「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

勇者のテンションが一気に跳ね上がった。スーパーエロハイテンシ
ョンだ

ゲス「な、何でゲスこの力は！？」

勇者「くられ！勇者特攻剣！！」

ゲス「ぐっはーでゲス」

勇者はみごとゲスを倒した。

勇者のエロレベルが1上がった

ゲス「これからもお前たちは狙われ続けるでゲス。油断しないことでゲスね」

勇者「何匹たりともこの俺を超えることはできぬう！」

宿

女「さ、寝よ」

勇者「本当に一緒にねていいのか？」

女「いやなの？」

勇者「いや、そういうわけじゃ・・・」

女「あたしは別にどっちでもいいんだからね」

勇者「ではお言葉に甘えて」

女「勘違いしないでよね！あんたと寝たいわけじゃないんだから」

女「私は先に寝るわ」

勇者「さてと、もみまくりですか」

勇者「パンツも脱がしてしまおう。そしてこのパンツはいただく」

女「う、ん」

勇者「おきたか？」

女「やだ、恥ずかしい」

勇者「大丈夫だって、いい乳首してるぞ」

女「もう、エッチ」

勇者「あはは、気持ちよさ過ぎて眠くなってきた」

勇者「はあよく寝た」

女「私のパンツ知らない？」

勇者「知りませんなあ」

女「どうせあんたが持つてるんでしょ」

勇者「な、何でそれを!？」

女「やっぱり、べつにいいけど」

勇者「いいの？」

女「はやく次の町いこ」

勇者「そうだな」

勇者「次仲間にするのはうゝんどジッコツンデレ巨乳はいるから無表情で無口なロリッコキヤラだな!」

女「あんたはそんなことばかり・・・上見ながら歩いてると落とし穴とかにはまったりするよ」

勇者「まさかそんな落とし穴なんてあるわけないだろ」

女「そうね、落とし穴なんか・・・きゃあ」

見事落とし穴にはまったそうなの

女「なんでこんなとこに落とし穴が・・・」

勇者「大丈夫か?（次からは俺も気おつけよう）」

脱出！勇者の本気！？（後書き）

まだ名前が決まってませんが早くしないと作者がきめてしまいますので

つきたい人はお早めに感想にて

無表情猫！

勇者たちは森で道に迷っていた。

勇者「ここはどこだー」

女「知らないわよ」

勇者「腹減ったしのど渴いた」

女「もう食料ものこってないわよ」

勇者「そうだ！おっぱい飲めばいいじゃん！」

女「だれがのますか！」

勇者「こつちだ！」

女「どうしたの急に？」

勇者「半径500m以内に女がいる」

女「何でわかるのよ！？」

勇者「いた！」

変な男A「へっへっへ俺たちときてもらっせ」

女の子「やだ」

変な男B「さからうのだったら何してもいいっておやびんいったよな」

変な男C「ああ」

変な男A「じゃあ服脱がしちゃうか」

女の子「！」

変な男B「おお、子どもにしちゃあなかなかの胸だぜ」

女「ちよつとあれ助けたほうがいいんじゃない!？」

勇者「までもう少し様子をみよう」

女「あんた女の子の裸みたいだけでしょ!！」

勇者「ばか!大声だすな」

変な男A「だれだ？」

変な男C「なんだこいつら」

勇者「お前のせいではれたんだからな」

変な男A、B、Cが現れた

勇者の攻撃変な男Aに3のダメージ

勇者「ついでに俺たちのも頼む」

女「ところであなたはなんで襲われてたの？」

女の子「あの人たちの魚がおいしそうだったから」

女「でも人のものとするのはよくないよ」

女の子「それはあいつらのほう。あいつらが私の川でとった魚もつてった」

勇者「じゃあ悪いのあいつらじゃん」

女の子「あいつらまだ私の魚もってるにゃあ」

女「にゃあ？」

女の子「私にゃあが口癖なの。あまりなおらないの」

勇者「まあいいじゃん。それよりあいつらぶっ飛ばしに行こうぜ」

無表情猫！（後書き）

女の子と勇者と女の名前決めたい方はは決めてください。

感想にてお願いします！

仲間ゲットだぜ！！

勇者たちは魚を取り返すべく男どものアジトへむかった

勇者「ここがあいつらのアジトか？」

女の子「そう」

女「ほんとにいくの？」

勇者「当たり前だろ！」

勇者「ごめんくださいーい」

女「何でそんなに丁寧に挨拶してんの！？」

変な男A「はい、どちらさん？」

女「普通にでてきた！？」

勇者「おやびんさんいますか？」

変な男A「うちのおやびんに何のようですか？」

勇者「おやびんさん宛てにお荷物が届いてます」

変な男A「え、ほんと？ちょっと今呼んできますね」

女「あいつ気づいてないの？」

勇者「あほでよかったな！」

女「どっちもどっちよ」

おやびん「俺宛の荷物ですか？まさかモンハン3rdか！？」

勇者「そうです。お支払いは魚でお願いしますね」

おやびん「え、魚もう食べちゃいました」

勇者「それは残念あなたにはここでくたばってもらいます！..」

勇者の攻撃おやびんの髪をほんの少し切った

おやびん「な！？お、俺のほんのわずかな髪をよくも――」

おやびんの戦闘力がどんどんあがってゆく

おやびんの攻撃「おやびんた！」

勇者に299のダメージ

勇者「このままでは」

勇者「力を貸してくれ」

勇者は女の胸をもみはじめた

女「きゃあああ！」

勇者「うつしゃあああああああ」

勇者の戦闘力がいつきに跳ね上がった

おやびん「なにことじゃあ!？」

勇者の攻撃「勇者五月雨ギリ!!」

おやびん「ぐはあ」

勇者「すまねえな魚は取り返せなかった」

女の子「ううん、いいの。ありがとう」

勇者「きおつけて帰れよ」

女の子「そのことだけど私も旅についていきたい」

女「家族が心配するよ」

女の子「家族はとっくに魔王にやられた」

勇者「いいじゃん、行こうぜ」

女「まあいいか」

女の子「ありがとう。にゃあ」

勇者は修行しているため電話に出ることができません！

勇者たちはとある町で別行動をとっているそうなの

勇者「俺に剣術を教えてくれ！」

師範「わしの教える剣は厳しいぞよ？」

勇者「え！？（どうしよう）いや、やります」

師範「うむ、ではまずこの道場の雑巾がけからじゃあ！」

勇者「ええ〜それ雑用押し付けられてんじゃん」

師範「なにをいうか！この雑巾がけで剣術の基本動作を覚えるんじゃない」

勇者「なるほど！そうゆうことでしたか！この勇者頑張つて雑巾がけいたします」

師範「じゃあわしは外にいるから終わったら声をかけるんじゃないぞ（ふうなんとかごまかせた）」

勇者「うっしやあああ！」

1時間後

勇者「終わったぞ！はあはあ」

師範「うむ、よくやった」

勇者「じゃあ次は剣術を・・・」

師範「次は庭掃除じゃ！」

勇者「な・・・また掃除かよ」

師範「まあそういうな、これで掃除は最後じゃ」

勇者「よっし！！」

1時間後

師範「おわったか？」

勇者「ああ」

師範「ではそろそろ剣術を教えよう」

勇者「ほんとか！？」

師範「うむ、道場に来い」

勇者「でどうやるんだ？」

師範「まあそう早まるな。普通にわしに斬りかかってこい」

勇者「いいのか？ククク、あんたじゃ受けきれるかわかんねえぜ？」

師範「わしは我流を育て上げる師範じゃ。わしができるのは剣の相手だけじゃ」

勇者「いくぜー！ー！！」

修行終了

勇者「これで俺もちつとは強くなったかな？」

女「あ、あんたどこ行ってたの？」

勇者「おまえこそどこに・・・」

女の子「あ、見つけた」

勇者「みんな修行してたのか！？」

女「私だつて強くないと足でまといになるからね。別にあなたのためじゃないのよ!」

女の子「にゃあ? 私は勇者のため」

勇者「そうか、ありがとう」

女「ホテルで予約取ったからいい」

勇者「ホテル!？」

女「今いやらしいこと考えたでしょ？」

勇者「いえ・・・そんな・・・」

女の子「勇者は女の人の体見たり触ったりするのすきなのか？」

勇者「え、えつと・・・もちろんそうだああああ!」

女「うわ〜」

女の子「じゃあ私の触っていいよ。にゃあ」

勇者「え!?! じゃあお言葉に甘えて」もみもみ

女「甘えんな!」

勇者「ふむ、女のと比べると小さいがなかなかのやわらかさ」

勇者「ありがとうございます！！」

女「このばああああ！！！」バキッ

勇者「ぎゃああああああああああああ！！！」

パワーアップした勇者は卵も握りつぶせるんだぜ？（前書き）

女と女の子の名前が決まりました！

女：マイ

女の子：アユ

え？センスがない？

悪かったね！今からでも変えたい人はいつてくれ

ちなみにアユは魚からとりました。

マイはテキトーです……；

パワーアップした勇者は卵も握りつぶせるんだぜ？

勇者「ふっふっふ、俺は修行で卵を素手で割ることができるようになったのだ」ドヤツ

マイ「あんたそんなの誰だって出来るわよ。あとドヤ顔やめて」

勇者「なに！お前卵を縦に割るのむずいんだぞ」

マイ「割れるの？」

勇者「う・・・そういうお前は何の修行したんだ？」

アユ「話そらした」

勇者「う、うるさい」

マイ「私は魔術よ。まだ強いのは無理だけど」

アユ「私は格闘術にゃあ」

マイ「で、卵は？」

勇者「もちろんこのように剣で真っ二つよ」スパッ

アユ「おお」パチパチ

マイ「な、なかなかやるじゃない」

勇者「あたぼうよ。俺とて遊んではかりじゃなかったからな」(うまくいってよかった)

アユ「あ！あっちに村がある」

勇者「なに！？いくぞ」

勇者「ぼろい村だな。なにかあったのか？」

マイ「だれかいるわ！」

村人「何じゃあんたたちは？」

勇者「俺は勇者だ！」

村人「な、なんじゃと本物の勇者様ですか！？」

村人たち「なんだって？勇者がきたのか？」

マイ「この村で何があったの？」

村長「じつはここ数日妙な魔物が襲ってくるのじゃ」

勇者「妙な魔物？」

村長「姿が一切見えず、戦おうにも戦えないんじゃ」

アユ「にゃあ、まかせて」

マイ「いいの？姿が見えないんだよ？」

勇者「何いつてんだお前、見えないなら相手の気を感じとればいい
だろ？」

マイ（あんたが何いつてんの！！？？？）

勇者「とりあえず任せてくれ！」

村長「なんと頼もしい」

勇者「魔物退治にいきますか！」

マイ「まって！なにか飛んでくる」

アユ「魔物？」

魔物「貴様らが勇者か？」

勇者「そうだ！」

魔物「シャボの塔にこい。」

マイ「きゃあ！」ガシ

アユ「にゃあ？」ガシ

魔物「こなければこの女たちはどうなるかわからんぞ？」

勇者「な、なんてエロい魔物だ」

魔物「おい！勘違いするな！こいつらは人質だ。やましいことはだ
な・・・」

勇者「言い訳すんなよ！！男だろオオオオオオ」

村長「まったく近頃の魔物ときたら」

魔物（魔物なんで俺がこんなめに）

村人「勇者様助けに行かれるのでしたら村人を一人貸します」

勇者「本当か！？助かる」

トーマ「どうも、トーマです。よろしくお願いします」（男）

勇者「ああ、よろしく」orz

トーマ「さあいきましょー！」

見違えた勇者の力!?

勇者はさらわれた二人を助けるためトーマとともにシャボの塔へ行くことになった。

シャボの塔

勇者「この塔に二人がいるんだな」

トーマ「はい、でも気をつけてください。見えない魔物がいるらしいですから」

勇者「そうだな、じゃあまずお前から入っていいぞ」

トーマ「ええ!?!なんで僕が先に!?!」

勇者「いいじゃないか!パーティの先頭歩けるんだぞ?」

トーマ「そういう問題じゃなくてですね」

勇者「しょうがねえな。俺先いくぞ」

トーマ「あつ待ってください」

勇者「まったく・・・無駄に広いな。道に迷ったぞぞぞ！」

トーマ「困りましたねえ」

勇者「もしかしたらその辺に隠し扉でもあるんじゃないか？」

トーマ「その可能性もありますね」

勇者「お！このスイッチ怪しいな。罠かもしれん、だが押してみたい」ポチ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

勇者「ん？なんだ？」

トーマ「勇者様！扉が出現しましたよ！」

勇者「計算どおりだ！（マジかよ！）」

勇者「ん？なんだこの張り紙」

ボスの部屋です。準備は整っていますか？

トーマ「どうやらボスがいるみたいですね」

勇者「アホか！！アホなのか！？」

勇者「お邪魔しまーす」

トーマ「誰もいませんね」

???「ふっふっふ・・・よくきたな」

勇者「誰だ？」

???「わしはこのボス、カメレオンじゃ」

勇者「カメレオンだと！？どうりで見えないわけだ」

トーマ「まずいですよ、勇者様。相手が見えないのに勝てるわけが・・・」

勇者「パワーアップした俺の力をそこでみてろ！」

ボス「わしに勝つだど？無駄なことを。わしがどこにいるかわかるのか？」

勇者「そこだ！！」ズバッ

ボス「ぐ・・・なぜわかった！？」

勇者「お前からあふれ出る気を感じ取ったのさ」

ボス（な、何言っでやがるこいつ）

勇者「これでとどめだ！」

ボス「やめろおおお！こいつがどうなってもいいのか？」

勇者「トーマ！」

トーマ「僕なら大丈夫です」

ボス「何を根拠にそんなことをいつてるんじや？お前はここで終わる！」

トーマ「くつくつく・・・お前こそなにを根拠にいつてるんだ？ああ！」

ボス「な、なに！？」

トーマ「はああああ！」

ボス「く、くそ」

勇者「よくわからんがよくやった！これで終わりだ！！」

ボス「ぐわあああああああああ」

勇者「ふう、さてあいつらはどこだ？」

トーマ「おそらく奥だろ」

勇者「おまえなにがあつたんだ？」

トーマ「おい！出てくるんじゃない！・・・ちっ、しかたねえな」

勇者「??.?」

トーマ「どうもお騒がせしました」

勇者「二重人格!?!」

トーマ「はい、危ないときは入れ替わるんです」

勇者「二重人格なんてなじでいたのかよ」

トーマ「さあ、早く見つけましょう」

見違えた勇者の力！？（後書き）

すいません。今回は女性陣だせませんでした

次回はほとんど女性陣でおおくりいたします！

女をなめると痛い目みますよ？

時は少しさかのぼり勇者が塔に到着したとき

魔物「お前たちはそこでおとなしくしてろ」

マイ「ロープで縛られて魔法が使えないじゃない」

アユ「ほどけない」

マイ「でも勇者が絶対助けにくるわ」

魔物「ふっふっふ・・・それはどうか？勇者がきてもボスがいる」

マイ「だから何なのよ！そんなやつが勇者にかてるわけない！」

魔物「たとえ姿が見えなくてもか？」

マイ（そういえば村で見えない魔物が襲ってきたって・・・）

魔物「実はさつきからお前らの近くにいたのだよ」

マイ「え!？」

ボス「くっくくく・・・お前いい体してるなあ」

マイ「きゃあ！ちよつと・・・どこ触ってるのよ!」

ボス「この巨乳はたまらん」

マイ「あ・・・あん」

ボス「巨乳もいいが貧乳もいいかもな」

アユ「にゃあ!」

ボス「ふふふ・・・こいつらは勇者にはもったいなさ過ぎる」

アユ「あ・・・にゃ・・・あん」

ボス「さてと・・・まだこいつらと遊びたいが少々用事があるので
わしは自分の部屋にいるぞ」

魔物「勇者などきてもボスを前にしたら意味ないのだ。わかったか
?」

マイ「わかんないわね。それにさっきのボスのおかげで縄がゆるん
だわ」

魔物「たとえ縄を解いたとしても貴様らじゃ俺にはかなわん」

マイ「そう?やってみなきゃわかんないわよ」

魔物「かかってこい」

魔物があらわれた

マイの攻撃

マイ「フレアボール！」

魔物「魔法か」

魔物の攻撃

魔物「くらえー」

アユ「させない！」

魔物「ぐふう」

魔物の攻撃は阻止された

アユの攻撃「とび蹴り」

魔物に80のダメージ

魔物「このままでは・・・」

マイ「さっきまでの威勢はどうしたの？」

魔物「俺にはまだ第二形態があるのだ！！」

マイ「フリーズブロック！！」

魔物に130のダメージ

魔物を倒した

アユ「最後までかわいそうな魔物だったね」

マイ「それよりはやく勇者のどこに行きましょう」

魔物（・・・これが魔物としての定めなのか）

勇者「ふう・・・かたずいたぜ」

トーマ「はやく二人を探しましょう」

そのとき扉がひらき後ろから声がした

マイ「勇者!？」

勇者「お前ら!？無事だったのか？」

マイ「私達だつて強くなつてるのよ？」

アユ「うしろの人は誰？」

勇者「こいつはトーマだ。きにいったからこいつも旅に連れてくわ」

トーマ「旅にですか?・・・僕がいいんですか？」

勇者「あたりまえだろ」

トーマ「ありがとうございます」

「マイ」ちっ！村にもどるっ

勇者の聖夜は恋の夜！？

勇者たちはとある町、「イルミナスシティ」にきていた。

マイ「ここは夜の夜景がものすごくきれいなとこなんだって」

勇者「夜景かあ、よし今日はここに泊まろう！！」

トーマ「すごいですね。都会は。あちこちに電飾が飾られてますね」

アユ「大きい建物がいっぱい」

勇者「おい！むこうに遊園地あるぞ！いこつぜ」

アユ「おー」

トーマ「僕たちもいきましようか」

マイ「そうね」

そして夕方

勇者「だいぶ暗くなってきたな」

マイ「そうね、それに人も多いしはぐれないようにしなきゃ」

勇者「そうだな・・・ってあれ？」

マイ「どうしたの？」

勇者「アユとトーマがいない」

マイ「はやく探さなきゃ」

勇者「まて！むやみに動かないほうが・・・」

マイ「そうね、どこか目立つ場所で待ってるほうが」

勇者「目立つ場所・・・どこだ」

とそのとき突然マイが勇者の手をにぎった

勇者「マイ・・・」

マイ「しょうがないでしょ、こうしないとはぐれちゃうんだから」

勇者「そうだな」

勇者「どこいくんた？こっちは人気の少ないところだぞ」

マイ「・・・・・・・・」

勇者「これは！？カップルだらけじゃないか」

マイ「勇者・・・」

勇者「マイ・・・」

そして二人はキスをした

マイ「ん・・・・・・・・」

勇者「胸もさわっていいか？」

マイ「うん」

ホテル

アユ「あ、帰ってきた」

トーマ「遅かったですね」

勇者「まあな」

マイ「・・・」

トーマ（二人ともなにかあったんでしょうか？）

アユ（さあ）

マイ「私お風呂入ってくるね」

トーマ「僕はトイレいってきます」

アユ「・・・勇者ちよつときて」

勇者「どうした？」

夜の砂浜

勇者「どうしたんだ？」

アユ「マイとなにかあったの？」

勇者「なにかって別にたいしたことじゃ（たいしたことだけど）」

アユ「嘘！絶対なにかあった」

勇者「なぜそれを！？」

アユ「ほらやっぱり」

勇者「誘導尋問か！」

アユ「私ともやって」

勇者「え!？」

アユ「私も勇者のこと好き」

勇者「アユ・・・」

そして勇者はまたキスをした

アユ「う・・・んはぁもつと触って」

勇者「ああ」

勇者「そろそろかえるか」

アユ「うん」

トーマ「あ、おかえり」

マイ「どこいったの？あんたたち」

勇者「ちよつとな」

マイ「ふーーん」

トーマ「それより今屋上でパーティやってるそうですよ。いってみましょう」

勇者「そうだな」

マイ「食事が豪華ね」

アユ「おいしそうな魚が・・・」

トーマ「夜景がきれいですね」

勇者「そうだな」

トーマ「どうしましたさっきから？」

勇者「なんでもねえよ」

トーマ「そうですか」

アユ「勇者、これおいしいよ。私が食べさせてあげる」

勇者「ん、うまい」

マイ「あー！勇者私のも食べなさい」

勇者「おい、ちょっとまってそんなにつめこむな」バタ

アユ「あ、勇者が倒れた」

トーマ「大変だ！救急車を」

拝啓

これを読んでいる皆様

私勇者は食べ過ぎのため病院におります

皆も食べ過ぎて病院送りにならないように注意してくださいね（そ

んなやついないっつうのbyマイ)

厳しい突っ込みも入ったところで最後にいっておきます

「メリークリスマス」

者

by 勇

ライバル登場！！

勇者一行はとある洞窟にいた

勇者「そろそろ出口があってもいいはずだが」

トーマ「あ！あれは出口じゃないですか？」

勇者「やつと出口か」

????「まちな！」

勇者「だれだ！？」

????「俺はカイザル。勇者だ」

勇者「なに！勇者は俺だ！」

カイザル「ふん、勇者は俺一人で十分だ」

勇者「なんだと！」

カイザル「どうやら話し合いだけでは拉致が開かないようだな」

勇者「おもしろい・・・やってやる」

マイ「なにこの展開・・・」

カイザル「貴様にはここにくたばってもらおう。はあああああ」

勇者「悪いが負けるわけにはいかん!!」

アユ「加勢しなくていいの？」

トーマ「だめです！これは決闘です。邪魔してはいけません」

カイザル「これで終わりだ!!」

勇者「あまい!!!はあああ!!」

カイザル「ぐ・・・ふ・・・」

勇者「勝負あつたな」

カイザル「ふふふ、まだ終わりじゃないぜ」

勇者「まだやるのか？」

カイザル「俺とてここでくたばるわけにはいかん!!」

勇者「なんどやったって同じだ!!」

カイザル「魔王を倒すのは俺だ！邪魔はさせん」

勇者「やはりおまえも魔王をたおすのか・・・なら一緒にたおせばいいじゃないか？」

カイザル「ふざけるな！！俺は一人で倒すんだ！ほかのやつはいらん」

勇者「なぜそこまでこだわるんだ？」

カイザル「俺は昔魔王に村を襲われたのさ。村の人はほとんど全滅・
・のこった俺はただ魔王を倒すことだけを考えてきたんだ。だから誰にも邪魔はさせねえ！」

勇者「まだ立ち上がるか！？」

カイザル「はあああああああ！！」

勇者「ぐ・・・こいつのどこにこんな力が」

そのとき洞窟内に風が駆け巡った

マイ「きゃあ！」

勇者「パンチラきたあああああああ！！！」

カイザル「な、なんだ！？急にこいつの力が」

勇者「うおおおおおおお」

カイザル「く・・・くそ・・・今回の勝負はおあずけだ」

そういつてカイザルは去っていった

マイ「おあずけって勇者の勝ちだったじゃん」

勇者「まあそういうな、あそこでお前のパンチラがなかったら正直やばかったぞ」

マイ「あんたねえ」

トーマ「それより街が見えてきましたよ」

アユ「また都会だあ」

マイ「前の町より大きいわね」

勇者「よしくぜ」

カイザル「勇者か・・・いつか必ずけりをつけてやる」

お嬢様出現！？

勇者たちは洞窟をぬけた先の町「ダイシティ」にいた

勇者「でかい町だな」

マイ「とりあえずホテルで一休みしましょう・・・と思ったところだけど・・・」

トーマ「お金が無いんですね。わかります」

アユ「今日は野宿？」

トーマ「そうなるかもしれませんね」

勇者「なんてこった・・・金がないなんて」

マイ「あんたがいつもギャンブルにつかうからでしょ」

勇者「ああゝ久しぶりの野宿かゝいやだなあ」

???「どうかなさいましたか？」

勇者「誰ですか？」

???「申し送れました。私はセレナ・マドレーナですわ」

セレナ「この町の一番中心のお屋敷に住んでおりますの」

勇者「屋敷？．．あのでかい？」

セレナ「はい」

勇者「ええ！！お嬢様ですか！？」

アユ「お嬢様？」

マイ「お嬢様ってゆうのはねお金もちのことよ」

アユ「私達と正反対だね」

マイ「アユ、そこは笑顔でいっちゃだめだよ」

セレナ「皆さんお金がないのですか？」

マイ「はい．．．」

セレナ「でしたら私の家にご案内しますわ」

マイ「え！？いやいいんですよ、気をつかわなくても」

セレナ「そうご遠慮なさらず」

マイ「まいったな」

勇者「狙っただろ」

マイ「そ、そんなわけないでしょ！」

トーマ「でかいですね」

勇者「でかいな．．．胸が」

トーマ「そっちですか!」

セレナ「どうかしましたか?」

トーマ「いえ!なんでもないです」

勇者「トーマがセレナの胸でかいって」

トーマ「それ僕じゃありません!」

セレナ「まあ、ありがとうございます」

マイ「トーマ．．．ひくわ」

トーマ「ちょ．．．引かないでくださいよ」

セレナ「それよりお風呂はいいですか?」

勇者「おお!いいねえ」

勇者「どうした？トーマさっきから暗い顔して？さっきのは悪かったって」

トーマ「いや、さっきからなにか不吉な気配がしてるんですが・・・」

勇者「不吉な気配？」

トーマ「そうです。この屋敷に怪しい人物がいるかもしれません」

勇者「まあそこは注意しとくとして俺は女風呂でも覗いてきます」

トーマ「・・・・・・・・・・」

その夜

トーマ「・・・・・・・・・・誰だ？」

「？？？」
「・・・・・・・・・・」
「・・」

トーマ「おい！出てきやがれ！」

「???」……………「ガタッ

トーマ「ちっ、逃がすか！！」

「???」……………「.

トーマ「追い詰めたぜ」

「???」……………なかなかやるな、貴様」

トーマ「誰だおまえ？」

「???」僕はサノクス。ある人の依頼で君を抹殺しにきたのさ」

トーマ「依頼？はっ、誰だかしらねえが俺の殺そうとしてるとはな。どういう理由だかしらねえがそいつおしえな！俺がつぶしてやるよ」

サノクス「ずいぶんおしゃべりだね。その余裕はどこからでくるんだい？」

トーマ「てめえこそな！」

トーマVSサノクス

サノクス「双剣か．．．いい武器を使うね」

トーマ「そーゆうお前は何だ？」

サノクス「僕も双剣だよ、でも僕は双剣だけじゃないけどね！」

お互いににらみ合っていた二人はほぼ同時に斬りかかった。

トーマ「双剣だけじゃないってゆうのはいったいどういうことだ？」

サノクス「今にわかるよ」

その時サノクスが突然トーマと間合いを取った

サノクス「はは、見せてあげるよ！これが僕のもうひとつの能力さ」

トーマ「魔法か！」

サノクス「フレイムランス！」

トーマ「めんどくせえな」

トーマはサノクスの攻撃をかわしたが

サノクス「後がから空きだよ」

トーマ「ちっ」

ズシャッ

トーマの背中から血が滴り落ちる

サノクス「こんなのもだったのか？つまんないや。一気に止めを刺してあげるよ」

サノクス「食らえ！」

トーマ「俺に止めをさすだと？笑わせやがって」

サノクス「この状況で笑うとは・・・でももう終わりだよ！」

サンッ

サノクス「これで完全に死んだか」

トーマ「誰が死んだって？」

サノクス「何！？」

トーマ「甘いのはお前だったようだな」

ザシユッ

サノクス「なぜだ・・・確かに君を斬ったはずなのに」

トーマ「斬ってねえよ。お前が斬ったのはただの残像だ」

サノクス「何だっ．．．て」

サノクス「君はいつたい何者だ？」

トーマ「ただの勇者の仲間だ。そしてと忍者だ」

サノクス「忍者．．．どうりで早いはずだ」

トーマ「それよりそろそろ聞かせてもらっせ」

サノクス「ああ．．．依頼のことが」

サノクス「僕はただのおとりだよ．．．君をおびき寄せるためのね」

トーマ「何！？」

サノクス「急いで戻ったほうがいいよ、依頼者がお嬢様のところに向かってるからだね」

トーマ「っち、めんどくせえが甘いな。城にはまだ勇者がいる」

サノクス「そうか．．．頼もしい勇者だね」

その時トーマに斬られたサノクスの服がずれ落ちてサノクスの上半身が丸見えになった

トーマ「！？おまえ．．．まさか．．．」

サノクス「ばれちゃったか．．．べつにいいだろ女だって」

サノクスの胸はまだ小さいもののそれは明らかに少女ぐらいの大きさであった

サノクス「あんまりみないでくれ／＼僕には動く力が残ってないんだから」

トーマ「っち．．．これを使え」

サノクス「布？へえ．．．あんがいやさしいところもあるんだね」

トーマ「さあな、俺はもう帰るぞ」

サノクス「．．．．．」

サノクス「．．．僕も君たちの仲間になつてみたかったな．．．」

狙われたセレナ（前書き）

キャラデータ

名前：勇者

年齢：20

職業：勇者

身長：172

体重：64

外見は金髪のつんつんとした髪でいかにも勇者っぽい格好をしている。

狙われたセレナ

「くっくくく、この屋敷の金はすべてわしがもらっていくぞよ」

セレナの部屋

「ここがお嬢様の部屋か」

「なかなかいい体をしておるのぉ」

勇者「まちな！」

「何者じゃ!？」

勇者「セレナに何をするきだ？」

「ふおっふおっふお、ただちよっとお顔を拝見しようかと」

勇者「次嘘いたらつぶします」

「え、えっとそのこのお嬢様を殺しにきたのさ」

勇者「なるほど．．．処刑だな」

???「な、何!？」

勇者「おらあ!覚悟しな!」

???「こうなればわしの魔術で消し飛ばしてやるわ」

勇者「何だこいつ．．．くそよええな」

???「まさかのわしの魔術があたらないとは」

勇者「セレナは無事だな．．．．．なかなかいい体してるな」

勇者「な、なんとやわらかい胸だ．．．マイよりもやわらかいとは」

セレナ「う、ん」

勇者「やばいおきた!」

セレナ「あら勇者様．．．あら?なぜ私は服を着ていませんの?まさか勇者様が」

勇者「え！？こ、これは．．．僕がやりました」

セレナ「あらあら勇者様ったら、もっと触ってもよろしいのですのよ？」

勇者「え．．．ではお言葉に甘えて」

セレナ「あ．．．あん、ん．．．ああん」

セレナ「勇者様．．．私勇者様たちについてゆきますわ」

勇者「いいのか？」

セレナ「はい、こんなことされてはもうついてゆくしか．．．」

勇者「とゆうわけでセレナを連れてゆく」

マイ「ふうん、あんた女の子集めるのが趣味なの？」

勇者「いや、そうゆうことじゃ」

アユ「セレナはなんでついできたいの？」

セレナ「それは勇者様があんなことをなさるから¥¥¥」

マイ「あんたいったい何したのよ？」

アユ「じー」

勇者「ちょ、セレナなにいつてんだ俺はなにもぎゃー——」

トーマ「ふう」

トーマ（結局あいつはもういなかったな）

トーマ（そうだね）

トーマ「いったいどこにいったんだろ」

狙われたセレナ（後書き）

キャラデータ

名前：マイ

年齢：18

職業：魔術師

身長：167

体重：？

金色の髪で長さはセミロング。短いＴシャツをきていつもおなかを出して下は短パンをはいていて太もが見えている。露出が多くスタイルもいいためよく痴漢にあうがそのたび痴漢を殴るが時々間違えて違う人を殴ったりしてよく警察のお世話になるというドジな面も。

立ちはだかる敵（前書き）

キャラデータ

名前：アユ

年齢：14

職業：格闘家

身長：155

体重：37

おとなしくあまり感情を表にださない性格。青い色の髪をしており長さは肩ぐらいいくかどうかぐらいの長さ。普通の女の子の格好をしているがその細い手や足からはとんでもない破壊力の技を繰り出す。

立ちはだかる敵

砂漠の町「シスコーンシティ」

勇者「なあ、今思ったけど魔王ってどこにいるの？」

マイ「さあ」

勇者「おい！どうゆうことだそれ？」

マイ「てゆうかいつも先頭あるいてたのあんたじゃない？」

勇者「む、たしかにそうだ」

トーマ「こまりましたねえ」

セレナ「魔王はだいたいお城にいるのもですよ」

勇者「だがその城の場所がわからないんだよなあ」

アユ「誰がいる！」

「???」「ふふふお前らが勇者一行か」

勇者「誰だお前!？」

「???」「俺は魔王五属性特殊部隊隊長のヒュードだ」

トーマ「三下がなんのようだ？」

ヒュード「君は二重人格をもつトーマか」

トーマ「知ってるのか？」

ヒュード「俺をなめないでほしい。君たちのデータは取らせてもらってるよ」

セレナ「あらあらなんでそんな個人情報を集めていらっしゃいますの？」

ヒュード「君は知らないなあ。仲間になったばかりなのか」

セレナ「そんなことより質問に答えてくださいます？」

ヒュード「おお、怖い怖い。俺は調査部隊もかねているのさ」

勇者「で、お前は何しにきた？」

ヒュード「魔王様のご命令でね、君たちを招待したいのさ」

勇者「魔王の城にいけるのか？」

ヒュード「ああ、だが簡単にはいけないよ」

勇者「どうゆうことだ？」

ヒュード「魔王の城はこの世にはない、別の次元にある。君たちに

は城に入るために必要な宝玉を捜してもらつよ」

勇者「宝玉はどこにあるんだ？」

ヒュード「それは教えられないよ。宝玉は全部で5個あるから頑張つて」

勇者「いや、いいこと思いついたぜ。お前を倒せば宝玉なんて捜さなくても城にいけるんだろ？」

ヒュード「やめとけ、今の君たちじゃ俺に傷を負わせるどころかあてることすらできない」

トーマ「そんなもんやってみなきゃわかんねえだろうが!!」

ヒュード「無駄だっていったらう」

マイ「アイスランス！」

ヒュードはすべての攻撃をかわした

ヒュード「じゃあ頑張つてね」

勇者「逃げるのか!？」

ヒュード「逃げる?このごに及んでまだ挑発するのか。思い上がるなよ人間風情が」

ヒュード「降れ雷よ、やつらに裁きをあたえよ!」

勇者「雷が．．．」

全員「うわあああああああああああ」

勇者「ここは!?!」

マイ「よかった起きた。ここは宿よ」

勇者「俺たちは負けたのか．．．まさかここまで力の差があるとは」

勇者「もっと強くないと」

アユ「でもどうやって?」

セレナ「私強くなるのにいい場所をしましよ」

勇者「なに!?!」

トーマ「それはどこなんです？」

セレナ「この砂漠にあるもうひとつの町、フラムですわ」

勇者「じゃあまずそこに行こうぜ！」

立ちはだかる敵（後書き）

キャラデータ

名前：トーマ

年齢：17

職業：双剣士

身長：165

体重：55

黒い髪でごく普通の少年だが二重人格で身の危険を感じたときはもう一人の凶暴な人格と入れ替わる。

またまたパワーアップ！（前書き）

キャラデータ

名前：セレナ

年齢：18

職業：不明

身長：167

体重：？

黒くて長い髪が特徴。巨乳で勇者によるとマイよりも胸が柔らかいらしい。

またまたパワーアップ！

勇者たちはパワーアップするためもうひとつの砂漠の町「フラム」へやってきた。

セレナ「この神殿でパワーアップできるそうです」

勇者「さっそく行こうぜ」

???「ちょっとお待ちを、どなたですか？あなたたちは」

勇者「そちらこそどなたですか？」

マーツ「おっと、わしの名はマーツじゃ」

勇者「俺たちは勇者だが」

マーツ「やはり勇者様でしたか」

トーマ「僕たちになにか？」

マーツ「わしはこの神殿の神官をやっていますのじゃ」

勇者「なら話は早い」

アユ「まって、パワーアップって具体的にどうゆうのなもの？」

マーツ「パワーアップとは己の中の潜在能力を引き出すことじゃ」

マイ「潜在能力を？」

マーツ「そうですじゃ。能力とは個人個人で違うのじゃ」

勇者「それは楽しみだな」

マーツ「しかしまれに能力を二つもつものもいるのじゃ」

アユ「いいな二つ」

マーツ「そろそろつきますじゃ」

ドラゴン「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

マイ「ドラゴン！？」

マーツ「大丈夫ですじゃ。あれはただのおじさんです」

アユ「おじさん？」

するとドラゴンが急に30代ぐらいのおじさんになった

マーツ「あいかわらずじゃの、ニーズ」

ニーズ「よお爺さん、こいつらは誰だ？」

マーツ「彼らが勇者様たちじゃ」

ニーズ「そつか、お前らが勇者か」

勇者「なんでこの人はドラゴンになってたんだ？」

マーツ「これも能力のひとつですじゃ、ただこいう能力はめずらしいのですじゃ」

アユ（・・・猫になりたい）

マーツ「では勇者様から行きますよ」

勇者「これでみんな終わったか？」

マイ「うん」

マーツ「皆さんの能力がわかりました」

マーツ「勇者様、光 マイ様、爆発 アユ様、氷 トーマ様、影と
虎 セレナ様、重力と空間」

勇者「光・・・」

マイ「爆発ってどうゆうこと？」

アユ「猫がよかったにゃ」

トーマ「二つですか」

セレナ「私も二つですわ」

マーツ「なんと二つの能力をもつものが二人もでるとは」

勇者「使い方がわからんのだが・・・」

マーツ「まあそのうちわかるようになりますじゃ」

ニーズ「おい坊主、お前魔王を倒しに行くとか言ってたな」

勇者「そうだが、どうしたニーズ？」

ニーズ「俺も魔王狩りつれてってくれや」

またまたパワーアップ！（後書き）

キャラデータ

名前：カイザル

年齢：不明

職業：勇者

身長：175

体重：58

紅蓮の鎧を身にまとった勇者。幼いころ魔王に村を襲われそれ以来魔王に復讐するため勇者になった。

ニーズの挑戦！（前書き）

キャラデータ

名前：ニーズ

年齢：36

職業：ドラゴン！？w

身長：185

体重：78

かなりでかい体格。桜色の髪をしたおじさん。

ニーズの挑戦！

勇者「ニーズも行きたいのか？」

ニーズ「ああ、だがその前に俺と決闘しな」

勇者「決闘！？」

ニーズ「俺は昔魔王に一人で挑みにいったんだ。だが結果は惨敗・
・お前が魔王を倒すんならまず俺を倒せるくらい強くねえとな」

勇者「なるほど、そういうことか。その決闘受けて立つ！」

ニーズ「時間と場所は今日の夜、神殿だ」

勇者「おし！」

宿屋

トーマ「よかったですか？」

勇者「ああ、なんか今は負ける気しねえんだ」

アユ「勇者頑張って」

勇者「おう」

マイ「でも相手はドラゴンになるのよ？」

セレナ「そうですね。勇者様に万が一のことがあった場合私・・・」

勇者「任せとけて！」

神殿

ニーズ「ちゃんと来たか」

勇者「逃げるわけねえだろ」

マーツ「わしが立会人になりますじゃ」

ニーズ「そんじゃとつとはじめるか！」

両者がいっせいに動き出した。

ニーズ「部分変化、ドラゴンクロウ！」

ニーズの手がドラゴンになり腕を振り下ろしてきた

勇者「まずい！」

一瞬だった。勇者はいつの間にか相手の攻撃をかわしていた

ニーズ「なるほど」

勇者「今のが俺の能力？」

ニーズ「余所見してんじゃねえ！部分変化、ドラゴンテイル！」

今度はニーズの腰あたりに尻尾が出現し、それを振り回してきた

その尻尾は神殿全体をなぎ払った

勇者「これはジャンプするしかない」

ニーズ「はっはっは、これで終わりだ！ドラゴンプレス」

次は顔がドラゴンに変化して口から炎を吐いた

勇者は空中にいるため回避ができない

勇者「これはやばい・・・」

ニーズ「勝負あったな」

勇者「そいつはどうか？」

ニーズ「なに！？」

勇者は身動きのとれない空中で炎をかわしてニーズに目の前にいた

勇者はニーズのどに剣を向けた。

勇者「勝負あったな」

ニーズ「．．俺の負けだ。みごとだった」

ニーズ「しかしどうやって空中で俺の炎をかわしたんだ？」

勇者「あれはお前が神殿の柱を倒したから落ちてくる瓦礫を蹴ってお前のところに移動したのさ」

ニーズ「そうゆうことが．．お前なら魔王を倒せるかもな」

トーマ「勇者さん！終わったんですか！？」

遠くからトーマ、それにみんなが走ってくる

アユ「どうなったの？」

マイ「びっくりしたわ、ここにくる途中神殿が崩れる音がしたんだもん」

セレナ「おけがはありませんか？」

勇者「大丈夫だ！この勝負は俺の勝ちだ」

ニース「ああ、俺も勇者のたびに連れてってもらっぜ」

勇者「おう！」

勇者一行は新しい仲間を連れてオーブを探していたが・・・

勇者「この広い世界の中から五つのオーブを探すなんて無理だー
ー！！！」

トーマ「まあまあ、根気よく探しましょう」

マイ「でも勇者の言ってる事のほうが正しいわ。確かにかなり無理があるわ」

ニース「おいおい、急にいきずまったな」

セレナ「とりあえず近くの町に行って情報をあつめましょう」

勇者「そうだな、じゃあ町にいくぞー」

???「いたいた、あれが勇者か」

二丁の挑戦！（後書き）

キャラデータ

名前：サノクス

年齢：17

職業：双剣士、魔法

身長：162

体重：43

赤い髪をした少年姿の少女。髪の長さは前髪は髪が目にかぶるくらいだが、後髪は肩ぐらいまであるため結んでいる。

雪の町で・・・

勇者一行は雪の降る町「スノースノーホワイト」にきていた

アユ「前は砂漠だったのになんで雪なの？」

勇者「うるさい！これはたぶんワープしたんだ、きっと」

ニーズ「そんなことより情報を集めるんだろ？」

マイ「あんた今前回勇者に負けたから話題変えたでしょ？」

ニーズ「ち、違うぞ！これはあれだ、さっさと情報を集めなきゃな」

マイ「また話題を変えるつもり？」

セレナ「あっちはにぎやかですね」

トーマ「そうですね」

勇者「こんなことをしてる場合じゃない！情報を集めなくては」

ニーズ「そうだそうだ」

勇者「とりあえず二手に分かれよう」

勇者・マイペア

勇者「さて、俺達は向こうで情報を集めよう」

マイ「そう簡単に見つかるかしら？」

ニーズ・アユペア

アユ「私達はあっち」

ニーズ「情報集めの基本は相手の目をじつくりとみることだ」

アユ「なんで？」

ニーズ「それは相手がもし嘘をついていたら目をそらすかもしれないからだ．．．．．ってなんで俺の目をじつと見る？．．．俺は嘘などついてないぞ」

トーマ・セレナペア

セレナ「頑張りましょう」

トーマ「・・・・・・・・・・あそこに誰か倒れてる」

セレナ「え!？」

トーマ「これは・・・・・・・・・・サノクス!？」

セレナ「まあ、お知り合いの方ですの!?!いそいでどこかホテルへ」

セレナ「みんなも呼びましょう」

トーマ「いや、それはやめといたほうがいい。この子は敵だったんだ」

セレナ「敵?」

トーマ「だけど悪い人じゃない・・・・・・・・・・と思う」

セレナ「そうですか、では早くホテルへ行きましょう」

ホテル

サノクス「ここは．．．．．?」

トーマ「起きたかい?」

サノクス「君は．．．．トーマ」

セレナ「あなたは道端で倒れておりましたのよ」

サノクス「そうだ、たしかここへ来る途中君たちを見つけて後をつけていったんだけどなかなか声をかけるチャンスがなくて、その辺をさまよってたんだ」

セレナ「それはなんて悲しい．．私涙が．．．」

サノクス「なくな! 僕が惨めになるだろ。それより君はあのお嬢様かい?」

セレナ「．．?そうでございますわ。グス」

サノクス「君が生きてるってことはあの作戦は失敗に終わったんだね」

トーマ「結局勇者に阻止されたんだよ」

セレナ「それよりなんで倒れていらしたの?」

サノクス「僕寒いのは苦手なんだ」

トーマ「なにしにきたんだ?」

サノクス「そうだった。僕は君たちの仲間になりに来たんだよ」

トーマ「仲間!？」

火の双剣魔法使い

トーマ「仲間に!？」

サノクス「ああ、僕も魔王にちょっとしたかりがあつてね。だめ・
かな？」

セレナ「私はいと思いますよ」

トーマ「僕もいいけど勇者さんたちにも言ったほうがいいですね」

サノクス「ほ、ほんとか!？ありがとう」

勇者「なるほど、事情はわかった」

勇者「．．．．仲間でしょう」

サノクス「ありがとう」

勇者「あのときはただ雇われただけだったんだろ？なら悪いやつじゃないさ」

ニース「かしどつするんだ？まだひとつも手がかりがつかめてないぞ」

サノクス「手がかりつてもしかしてオーブのこと？それなら心当たりがあるよ」

勇者「何！？」

サノクス「魔王の城に行くための物だから簡単な場所にはないと思うよ」

マイ「じゃあどこにあるの？」

サノクス「人がとても立ち入ることのないような場所、一つは伝説の竜が住むといわれる洞窟、もう一つは魔王の手下が支配している塔ぐらいしかわからない」

勇者「それだけ手がかりがつかめればいいや、ありがとな」

アユ「今からいくの？」

勇者「いや、今日は一晩やすもう」

勇者「ホテルは久しぶりだなあ」

トーマ「そうですね、ここ最近は宿か野宿続きで……」

ニース「おい、お前ら何ないてんだ？とつと風呂行こうぜ。寒くて凍えちまう」

マイ「私達もお風呂いこ」

アユ「賛成」

セレナ「ではごゆっくり」

勇者「……………ちょっとまって！サノクスどこ行くつもりだ、いくら女の裸が見たいからってどうとうと女湯へ向かうやつがあるか！？女湯はこっそりと覗くものであってだな……………」

サノクス「ちょ、僕は女だ！」

勇者「へ？」

勇者はサノクスの胸を触った

サノクス「きゃあ！ちよつといきなりなにするんだ！」

勇者「こ、この感触はまさしく女のそれだ」

サノクス「わかっただろ、僕は女だ」

ニーズ「俺たちもはやくはいろうぜ」

勇者「あつっ！」

トーマ「体が冷えてると熱くないお湯でも熱く感じるんですね」

ニーズ「まったくおめえらもまだまだガキだな、こんなの全く熱く

ねえだろ」

勇者「ふっそんなのんきに風呂に浸かってていいのか？今女たちは露天風呂にいるころだろうな」

ニーズ「！！こんなことをしてる場合じゃなかったな」

勇者「いくしかない！作戦はCでいこう」

ニーズ「よし！．．．．．まで、トーマがいないぞ！」

勇者「なに！？この作戦はやつもないと成功しないんだぞ！」

ニーズ「こうなったらNでいこう」

勇者「やっぱりその作戦が一番だな」

ニーズ「あれ？いないぞ」

勇者「なんだと！？．．．．．いや、きた！」

トーマ「．．．．．まったくあの人たちは．．．．．ここは僕が止めなければ」

トーマ「二人とも、やめてください」

勇者「おう、トーマお前も覗きにきたのか」

トーマ「いや、僕は覗きにきたわけじゃ．．．」

勇者「いいからお前も覗いてけって」

トーマ「いや、あの・・・・・・・・・・」

とか言いつつ覗くトーマ

ニーズ「なるほど、サノクスもなかなかあるな」

トーマ「！」

勇者「どうした？トーマ」

トーマ「いや、べつに・・・・」

サノクス「ん？あ、あいつら！」

マイ「どうしたの？」

アユ「こっち見てる」

サノクス「フレイムランサー」

勇者「まずいばれた！魔法が飛んでくる」

ニーズ「だめだ逃げ切れない！」

三名「うわああああああ」

セレナ「はあくさっぱりしたわ。あらみなさんどうしたのですか？
焦げてますよ」

勇者「ちよつと熱いお湯にはいつて焦げたのさ」

セレナ「まあみなさんいったいどれだけあったかいお湯に入ってた
のですか？」

勇者「うーん千 ぐらいかな」

魔族の塔

勇者「ここが魔物の塔か」

マイ「不気味なところね。まあ魔物がいるんだし当然か」

勇者「おいおい、そんな余裕な顔してて大丈夫か？もしかしたらうしろから胸もまれるかも知れんぞ？」

勇者がそういった瞬間きりがかった。

マイ「ちよつと急に变なこと言わないでよ！………うてあれ？みんなは？」

「……ふふふ、なんてでかい乳だ」

マイ「きゃあ！……ちよつと……やめて……」

「……いいぞ、お前は我が物とする」

マイ「な、どこ行くきよ」

「……決まってるだろう、私の部屋さ」

「……は宙にういてそのままマイをさらって消えてしまった。

勇者「なんだったんだ今の霧？」

ニーズ「さあな、どうせ魔物の仕業だろ」

アユ「まってマイがない」

勇者「なに!？」

サノクス「さっきまでいたのにどうしたんだ？」

トーマ「まさか魔物の罠!？」

セレナ「ありえますね」

勇者「それより早く探しに行こう」

勇者たちは二手に分かれた

勇者・セレナ・アユ

勇者「どこいつちまったんだ？」

セレナ「よほどマイさんのことが心配ですの?」

勇者「ま、まあな」

アユ「……………」

セレナ「それにしてもどこでしょう?やっぱり最上階かしら?」

勇者「たしかにその可能性が高いよな、でも……階段が見つからないのだが」

セレナ「困りましたねえ」

アユ「この塔ってたしか霧がかかってたよね？」

勇者「そうだったな。でもそれがどうした？」

アユ「もしかしたらこれもさっきと同じで幻かも」

勇者「なるほど、どうりで階段が見つからんわけだ。俺達はずっとおんなじとこまわってたのかもな」

セレナ「そうときまれば早くこの霧を消しましょう」

勇者「よし！」

一方ニーズ・トーマ・サノクス

ニーズ「くそ！なんで階段がねえんだ、どうなってんだこの塔は」

トーマ「こんなことしてる間にもマイさんが」

サノクス「でもいったいどうなっているんだ？」

ニーズ「そうだ！いいこと思いついたぜ」

トーマ「どうしたんですか？」

ニーズ「おめえら俺の背中に乗れ」

サノクス「背中に？」

ニーズ「この壁邪魔だな、おらぁ！」

トーマ「いきなり壁壊して何してんですか！？」

ニーズ「いいからとっとと乗れ！部分変化ウィング」

サノクス「まさか・・・」

ニーズ「おうよ、このまま飛んでくぜ」

勇者「ここが最上階か」

アユ「あれ」

勇者「マイ！」

マイ「こないで！」

勇者「な、おまえ服は？」

マイ「変なやつに持ってかれたわ」

勇者「しかたない、俺のママント使え」

マイ「．．．ありがとう」

セレナ「それよりなにがあったんですか？」

マイ「なんか急に魔物がきて．．．」

???「おつともうきてしまったか」

勇者「誰だお前？」

???「私はコドガ、貴様ら何しに来た？」

勇者「きまつてんだろ！マイを助けにきたんだ」

コドガ「助けに来た？無駄だよめとけ」

勇者「なんだと、おまえふわふわ浮いてないでおりてこい」

コドガ「それで降りてくると思っているのか？」

セレナ「ここは私に任せてください」

セレナ「能力は重力と空間つまり

セレナ「魔物が浮いてる空間だけ重力に影響を大きくすればいいのですわ」

コドガ「な、なんだと！？おのれこしやくな」

勇者「地上にすればこっちのもんだ」

コドガ「ふふ、まだだ」

勇者「これはさっきの霧！？」

コドガ「幻覚を見るがいい」

勇者「くそ」

そのときひとつの爆発で霧がきえた

勇者「な、なんだ？」

マイ「どう？これが新しい魔法よ」

コドガ「な、なんてことを」

セレナ「すみません勇者様、もう力が続きません」

コドガ「お！体が軽くなったぞ」

勇者「またか」

ニーズ「おらあ！」

ニーズが壁を壊して入ってきてコドガに直撃した

トーマ「みなさん大丈夫ですか？」

勇者「ご苦労ニーズ」

コドガ「く、なにがおきた？」

勇者「また降りてきたなふふふ」

コドガ「ぎゃあああああああ」

勇者「ふう」

アユ「あれオーブじゃない？」

サノクス「うん、間違いない」

勇者「とりあえず一つ目ゲットだな」

マイ「勇者……」

勇者「どうした？」

マイ「ありがとう／＼／」

勇者「おうー！」

竜対虎

勇者「ここに伝説の竜がいるのか」

アユ「いつもすぐ目的地に着くね」

勇者「最近のRPGはマップ移動が簡単なんだぞ」

アユ「へえー」

トーマ「とりあえずここにオーブがあるかも知れないんですね？」

サノクス「確証はないけど僕が知る中で人がこないところはこないだの塔とここぐらいだよ」

勇者「まあなかったらまた別のところ探せばいいさ」

マイ「それにしてもここはなんか普通ね。こないだの塔は不気味だったけど」

セレナ「まあいいじゃないですか？このまま進めば」

ニーズ「．．．．普通すぎるのも案外こええぞ。気を抜いていきなり強い敵と遭遇するかも知れねえ」

マイ「なんか前回と似てるきが．．．．」

勇者「どうした？またさらわれるか？」

マイ「誰が！二度とつかまるもんですか」

トーマ「しかしおかしいですね、これだけ進んでるのに敵一匹出てこないんですから」

サノクス「これなら簡単に人が入れてしまっているが人がいないとこを見ると奥になにかいるかもしれないよ」

勇者「ドラゴンか」

ニーズ「まあ伝説の竜の洞窟なんだからドラゴンはいるだろ」

アユ「あれ？行き止まり？」

ニーズ「おいおい、ドラゴンすらないのか？」

勇者「一応お前もドラゴンだな」

「グオオオオオオオオオオオオ」

ニーズ「なんだいるじゃねえか」

竜「だれじゃ？わしの住処に侵入してるのは」

勇者「敵意むき出しだな。簡単には帰してくれそうにないぜ」

サノクス「でもちょっとでかすぎないか？」

トーマ「ちょうどいい、俺の新しい力を試してみたかったところだ」

竜「わしに逆らうというならば容赦はせんぞ！」

トーマ「かかってきやがれ」

トーマは自分の影を召喚した。

竜「たかが一人増えただけか」

トーマ「ならこれはどうだ！」

トーマは白虎に変化した。

勇者「竜対虎か・・・」

竜「二匹の虎なんぞ踏み潰してくれる」

トーマ「そいつはどうか？」

ヒュッ

竜「なに！？消えた！？」

ザシュ

竜「ぐ・・・」

トーマ「どうした？踏み潰すんじゃないのか」

竜「く・・・面白い」

ニーズ「なんだ、トーマのやつ楽しそうだな」

勇者「おい、ニーズお前まさか」

ニーズ「おいトーマ、俺も混ぜてくれ」

トーマ「ふざけるな！これは俺の戦いだ」

ニーズ「まあそういうなって。おまえちょっと押されてるだろ」

竜「三匹めか・・・わしも本気をだすでしょう」

ニーズ「俺も前回で行くぜ」

ニーズは全身がドラゴンになった。

竜「貴様もドラゴンか、だが本物のドラゴンにはかなわん！」

アユ「ニーズって全身変化するとすごく大きくなるんだね」

勇者「そうみたいだな。俺のときあれ使われてたら俺勝てなかったかもな」

トーマ「くそ！このおやじ邪魔だ」

ニーズ「しばらくお前は休んでな」

トーマ「俺はまだ戦える！」

竜「ごちゃごちゃうるさい連中だ」

ニーズ「くらえ！」

ニーズは炎のプレスをはいたと同時に竜もプレスをはいた。

その隙にトーマが竜を攻撃

竜「く．．．．」

ニーズ「最後は俺が決めてやる」

トーマ「邪魔するな！俺だ」

二人「うおおおおおおお」

二人の攻撃が竜に直撃した

竜「ぐ．．．．．ぐお」

ニーズ「今の俺だ」

トーマ「いや俺だ」

勇者「それよりオーブはあるか？」

竜「それならわしが留守のときに誰かが持って行っておったぞ」

マイ「え！？それって誰だかわかる？」

竜「遠くから見たからよくわからなかったが紅蓮のよろいをきておったぞ」

勇者「紅蓮の鎧…………まさか」

竜「知り合いか？やつからは魔族のおいがしたが」

勇者「！？」

魔王登場！

どうも！勇者です。

俺達はオーブを求めて竜の洞窟にいったがそこにはオーブはなかった。竜による話だと誰かが持っていたらしい。
竜の助言を頼りに俺達は南のまちにいった。

勇者「紅蓮のよろいといえば間違いなくカイザルだ」

トーマ「あのひとまやっぱり魔王のそこへいくんですかね」

マイ「そうですね」

アユ「でもしたらオーブの奪い合いにならないかな？」

トーマ「その可能性は高いですね」

勇者「そのときは俺が説得して見せるさ」

マイ「あいつがゆつこと聞くとと思う？」

ニーズ「うーむ、いったい誰なんだ？カイザルってのは」

セレナ「さあ、私達はさっぱりかやの外ですわね」

サノクス「そんなのどうでもいいからそのカイザルってのを倒しちやえばいいじゃん」

ニーズ「それは勇者が許さないかもだぜ？なんか仲いいっぱいし」

サノクス「じゃあどうするのさ？」

ニーズ「そのカイザルってのを仲間にするのが得策だろ」

セレナ「そうですね」

勇者「よし！みんなこの町にカイザルがいるらしいから早速探そうぜ」

マイ「またこうゆうやつ？」

トーマ「まあいいじゃないですか」

????「誰を探してるって？」

勇者「お前は！？カイザル！ちよーとどいいところに」

カイザル「相変わらずだな、てめえは」

ニーズ「おいおい、あいつがカイザルか？ガラのわりいやるうだな」

サノクス「それあんたがいえたことじゃないでしょ」

ニーズ「俺はそこまで悪くねえだろ」

カイザル「しばらくたったうちにへんなやつらまで増えてるな」

勇者「そうゆうお前は一人も増えてないのか？」

カイザル「俺は馴れ合うのは嫌いでね」

勇者「だったら俺達の仲間にならねえか？」

カイザル「おい、今言っただけだろう、馴れ合うのは嫌いなんだよ！」

マイ「あんたそんないいかないんじゃないの？」

勇者「まで！お前一人で魔王のところに行くつもりなのか？」

カイザル「ああ、だからなんだ？お前らのオーブをくれるのか？」

勇者「だったら俺と勝負しろ！オーブをかけて」

カイザル「面白い、お前の力など俺には遠く及ばないことを教えてやる」

勇者「うおらぁ！」

勇者は光の速さでカイザルに斬りかかる」

カイザル「光か、だが俺には通用せん。俺は闇だ」

勇者「な、なに！？」

カイザル「小さな光など巨大な闇にはかなわん」

勇者「く、くそ」

勇者は闇に取り囲まれたがその瞬間闇が割れた。

カイザル「なんだ！？」

「???」「ふふふ、お前たちの戦い見せてもらったぞ」

勇者「誰だ！？」

「???」「わらわは魔王なり」

勇者「！？」

カイザル「いいここに来たな、てめえは俺の手で葬ってやるよ！」

魔王「貴様、わらわとともにこないか？」

カイザル「ああ？いくわけねえだろ」

魔王「貴様はなにが望みがあるはずじゃ、それをかなえてやるっ」

カイザル「なんだと!？」

魔王「さあいうがよい」

カイザル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「」

勇者たちはカイザルがなにを言ってるかは聞き取れなかった。

魔王「なるほど、承知した。ではわらわについてくるが良い」

勇者「まで!カイザル、どこいくんだ!？」

カイザル「お前との勝負はお預けだ、このオーブはいらねえからやるよ」

勇者「まで!カイザル!!」

魔王とカイザルは闇のなかに消えていった。

勇者「くそ!」

ニーズ「なんであんなに悲しむんだ?カイザルとは敵どうしだろ?」

トーマ「カイザルは敵でありながら勇者さんのライバルだったのですよ」

セレナ「とりあえず今日は一晩休みましょう」

アユ「……………あともう少しで……………」

地底から山頂へ

勇者たちは森のなかで迷っていた。

勇者「・・・・・・・・」

ニーズ「またいきずまりか」

マイ「困ったわね」

トーマ「何か手がかりは・・・・」

アユ「また聞き込みやるの？」

サノクス「向こうから人が来るよ」

???「すみません、パルはパルと申します」

勇者「なにかようか？」

パル「パルはここで案内人をやっております」

ニーズ「案内？なんのだ？」

パル「はい、すぐそこに見えます、山の案内人です」

マイ「悪いけど私達べつにそんなとこ興味ないから」

パル「え、君たちはあの山に挑戦しにきたんじゃないのですか？」

トーマ「挑戦？」

パル「はい、ここはつわものの修行場とも言われているのですが最近あまり人がこないのです」

ニーズ「なんで人が来なくなったんだ？」

パル「おそらく魔物が現れたからでしょう。まったくもうパルさん商売あがったりです」

ニーズ「……………でお前は何がしたいんだ？」

パル「僕は案内をしたいのです。あなたたちは挑戦しますか？」

勇者「いいだろう」

パル「ほんとですか！？わーい、パルさん感激！」

ニーズ「……………なあこいつ男だよな」

トーマ「はい、みたところ歳もけっこういいところかと……………」

パル「それでは皆さん準備はいいですか？はいったら戻ってこれませんよ？」

アユ「思っただけどこの山どこまで続いているのかな？」

セレナ「見たところ雲で隠れて頂上が見えないですね」

パル「はい、この山は高さ10キロでございます」

マイ「一万メートル・・・・・・・・・・」

勇者「たけえな」

パル「そろそろいいですか？」

ニーズ「いまさら引きかえすなんてしねえよ」

パル「それでは出発ー」

勇者「なあ山に登るんだよな？」

パル「そうですよ」

勇者「じゃあなんで洞窟にいるんだ!？」

パル「それはですね、この山はとても急斜面になっているため山のなかから上るんです」

マイ「めんどくさいとこねえ」

パル「はい、そしてさらにめんどくさいことに一回下に進まなければいけないのです」

サノクス「なんでわざわざ下にいかなきゃなんないのさ？」

パル「この山の構造がそうになっているのです。こればかりはしかたのないことなのです」

アユ「したにはどれくらい進むの？」

パル「ざっと3キロです」

ニーズ「めんどくせえな、俺なら飛んでいけるがさすがに全員は無理だ」

パル「飛んでいくなんてだめです！そんなことしたらパルさん怒るのです」

ニーズ「俺はさっきから思うのだがこいつはちよくちよくいらつとくるな」

パル「テヘッ」

ニーズ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

勇者「落ち着けニーズ！」

サノクス「そうよ、いらいらしてるのはあんただけじゃないのよ」

「トーマ、なんか自然にドラゴン化してますよ」

「アユ、これを」

ニーズ「ふう」

勇者「アユ、いつたいなにを？」

「アユ、えさ」

「それなら、さあ」

アユ「これ、さっき町で買ったの」

勇者「この箱か、なにに、ドラゴンのえさ。ペットのドラゴンにあげるととても喜ぶ。しかしかなり危険なえさなので人間は食べないようにしてください」

トーマ「危険……」

マイ「大丈夫なのかしら……？」

二ズ「……………か、かれえええええ
ええええええええええええ！」

「パル、どうしたの!？」

「トーマ、これはまずい！」

勇者「こいつ、ドラゴンになるとちょっとでかくなるんだよな」

セレナ「これじゃ足場がもちませんわ」

サノクス「お、落ちる」

トーマ「サノクス！」

勇者「だめだみんな落ちる！」

勇者「う、ここは……………」

セレナ「目覚めましたのね！勇者様」

勇者「セレナ……………みんなは！？」

セレナ「私達以外みんな離れ離れになってしまいましたわ」

勇者「いったいどれくらい落ちたんだろう」

セレナ「とりあえずみんなを探しましょう!」

勇者「ああ、そうだな」

山頂到着

サノクス「マ．．．．．トーマ」

トーマ「はっ！？ここは？」

サノクス「さあ、僕たち上から落ちたみたいだよ」

トーマ「そうか、ニーズが暴走して．．．」

サノクス「それより大丈夫か？」

トーマ「あ、ああ特に問題はないよ」

サノクス「トーマ僕をかばったんだろ？どこかいためてないか？」

トーマ「ありがとう、大丈夫だよ。それよりみんなを探そう」

サノクス「うん、そうだな」

ニーズ「うっ、やつちまった」

アユ「大丈夫？」

ニーズ「おう、大丈夫だ。それよりみんなは？」

パル「ここにいるのは僕たちだけです」

ニーズ「うお！？お前いたのかよ」

パル「やつほー」

ニーズ「こ、こいつ……」

アユ「そんなことしてないでみんなを探そうよ」

ニーズ「ああ、そうだな」

勇者「誰かいないかなー」

セレナ「あれ？向こうから声が聞こえてきますよ」

勇者「誰かいるのか！？」

マイ「ちよつと、たすけてー」

勇者「マイ!？」

セレナ「大量の魔物に追いかけてますわ」

魔物「まてーい」

勇者「助けるか」

魔物「貴様らをこの山のてっぺんに上らせるわけにはいかん」

勇者「よし! 終わり」

魔物「まずい．．．．．ラサイド様に知らせなくてわ」

勇者「なんだそいつ？」

魔物「ふっふっふ、そんなこと教えるわけないだろ」

勇者「．．．．．」

魔物「この山のオーブを管理しているお方です」

勇者「おう、そうかありがとう」

マイ「何されたのかしら・・・」

セレナ「さ、さあ」

勇者「とりあえず上ろうぜ、みんなも上に向かってるはずだ」

マイ「そうね」

トーマ「ふう、だいぶ上ってきたな」

サノクス「そうだね、みんなもいるといいけど・・・」

トーマ「そうだね」

サノクス「あれ、頂上じゃない」

トーマ「やっとなつたか」

ラサイド「貴様らか、私の部下から報告を預かっているのは」

サノクス「誰だお前？」

ラサイド「私はこのオーブの管理者、ラサイドだ」

トーマ「やっぱりここにもオーブがあるのか」

ラサイド「貴様ら、オーブを取りに来たか」

トーマ「っは、だったらなんだよ」

ラサイド「ならばここで蹴散らすまでだ」

トーマ「上等だ、かかってこい」

アユ「ねえニーズ、背中によって飛んでいこうよ」

ニーズ「やだよ、俺こいつ乗せたくねーもん」

パル「こいつって僕ですか？ひどい」

ニーズ「はあ、もうだいぶ上ってきたなあ」

アユ「あ、あれは」

勇者「おう、お前ら無事だったか」

ニーズ「お、あれ？お前らだけか？」

アユ「トーマとサノクスはいないの？」

セレナ「私たちはあっていますせんわ」

ニーズ「じゃあもう頂上か、下にいるか」

勇者「とりあえず上ろうぜ」

パル「すいません、案内人としたことが」

ニーズ「まったくだ」

トーマ「く、くそ」

ラサイド「その程度か？」

トーマ「ああ？こんなもんじゃねえよ」

ラサイド「どうやら左手があまり動いてないようだが」

サノクス「やっぱり怪我してたんだな」

トーマ「ちげえよ」

ラサイド「ふ、あまり強がらないことだな」

サノクス「フレイムランス」

ラサイド「おっと、いくらお前らがあがいたところで私に攻撃は届かん」

サノクス「こいつ、強い」

勇者「おい！大丈夫か！？」

サノクス「あんたたち、くるの遅いよ」

ラサイド「雑魚がいくら増えようと私は倒せん」

ニーズ「けっこう苦戦してんのか？」

トーマ「お前は入ってくんな」

ニーズ「なに！てめ」

勇者「俺が倒す」

シュツ

勇者「手ごたえがない！？」

ラサイド「ふははは、貴様らじゃ私は倒せないといっただろう」

マイ「もしかして水！？」

ラサイド「よくわかったな貴様」

マイ「やっぱり水なんだ」

ラサイド「む、己誘導尋問か」

ニーズ「なら俺の炎で霧に変えてやるよ」

ラサイド「あまい、私は大気中の水を操ることができる。貴様の炎など消し去ってくれるわ」

ニーズ「くそ」

アユ「炎で霧に変えなくても直接凍らせばいい」

ラサイド「なに！？だがさせん、水をくええ」

アユ「大気中の水を使うならそれも凍らすまで」

ラサイド「な、なんだと」

ラサイド「くそ、凍らされて死ぬとは……………」

勇者「ふうこれでオーブはゲットだな」

パル「びつくりした、皆さん強いんですね」

ニーズ「ああ、おまえまだいたのか」

パル「はい、ずっとあなたの後ろに隠れてました」

ニーズ「こいつも凍らしてくれ」

勇者「なにはともあれアユ大活躍だな」

アユ「う、うん。ありがとう」

勇者「さあ帰るか」

マイ「どうやって？」

勇者「……………とんで？」

マイ「無理」

山頂到着（後書き）

まことに申し訳ございませんが、次回更新日は土曜日になります。

地獄の雪合戦！？（前書き）

えーと・・・土曜日更新するといっておいて書くつもりだったら12
時回ってましたー

申し訳ございません！

地獄の雪合戦！？

山でオーブを手に入れた勇者たちはいきずまりまた極寒の地に戻ってきていた。

勇者「なんでこんなに行きずまるんだ！？」

マイ「しかたないでしょ、情報が少ないんだから」

勇者「まえはこんなことなかったのに……」

トーマ「そりゃあまえは目的なしで歩いてただけですから」

勇者「いや、目的はあった！ちゃんと魔王の城を目指してたんだ」

マイ「魔王の城の場所知らずにね」

ニーズ「おまえらマジかよ、そんなんでよく旅続けてこれたな」

サノクス「まったくだ」

アユ「まったく、まったく」

ニーズ「おまえもな」

アユ「え？」

勇者「うーむ、とりあえず今日は息抜きでもするか」

ニーズ「どうした突然？」

サノクス「まあいいんじゃないかな、最近敵と戦ってばかりだったし」

セレナ「そうですね、読者も戦いばかりじゃ飽きるころだと思えますし……」

アユ「読者？」

勇者「いやいや、なんでもない。こら、ちょっとは慎め子どもがいるんだぞ」

セレナ「勇者様、す、すみません」

トーマ「ところで息抜きといっても何をしたらいいのか？」

勇者「そんなの決まってるだろ？息抜きといったらあれだ、雪合戦だ」

アユ「雪合戦？」

勇者「ああ、雪を投げて相手に当てる遊びだ」

アユ「ふーん」

サノクス「ちょっとまで僕はいやだぞ！そんな雪をぶつけ合うだけの遊びなんて」

トーマ「サノクスは寒いのが苦手なんだっけ」

ニーズ「サノクスが抜けるとして、人数は・・・ちようど6人か」

マイ「チームはどうやって決めるの？」

勇者「くじ引きに決まってるだろ」

勇者・アユ・セレナチームvsニーズ・トーマ・マイチーム

勇者「さっそく始めますか」

ニーズ「そうだな」

かくしてこれから始まる雪合戦。この雪合戦が地獄に変わるのを彼らは知るよしもなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6214p/>

こんな危険な勇者いていいの？

2011年1月30日02時41分発行